

3. 阿部憲政氏のタオルづくり

入社直後、工場長を任される

阿部憲政氏が1968年3月に高校を卒業し、同年5月に阿部春タオル工場に入社したときの話に戻そう。阿部氏は、入社と同時に工場長に就任し、それ以来およそ半世紀以上にわたり阿部春一筋でタオルを製造してきた。

父親は、タオル工場を立ち上げたものの、その運営は阿部氏に一任し、みずからは起業以前から勤めていた宮崎タオルで変わらず働いた。

高校を卒業したばかりの阿部氏は、阿部春タオル工場でいきなりタオルづくりの責任者としてすべての製織工程を担うことになったが、高校時代のタオル文化部の活動をとおして本番さながらにタオルづくりを経験していたため、慌てることなく対応できた。



結結婚式での記念写真

阿部春タオル工場が創業された1960年代は、バスタオルやタオルケットなどの大判タオルが好調であり、父親の職場である宮崎タオルから仕事を請け負い、少しずつ売上を伸ばしていった。阿部氏は、盆と正月以外はほぼ毎日タオルづくりに実直にとり組み、製織の経験を積んだ。そして、1975年に国家技能検定（織機調整）2級を取得した。

プライベートでは、阿部氏が28歳になった1977年に今治市の富田地区出身の幸子^{さちこ}氏と見

合い結婚し、所帯をもった。幸子氏は、タオルと無関係の仕事に就いていたが、阿部氏との結婚でタオルづくりについて学び、経理などの事務作業の傍ら製織もこなし、阿部氏をサポートした。

3人の子宝にも恵まれ、1978年に長女・真衣氏、1980年に長男・玲央氏、1985年に次男・育生氏が誕生した。前号で触れたが、長男と次男は阿部氏の後継者として阿部春工場でタオルづくりに励んでいる。そして、長女は2024年から幸子氏に代わって経理事務を任されている。

阿部氏の技術とその評価

阿部氏は、1983年10月に国家技能検定（タオルジャカード織機調整作業）1級を取得し、誰もが認める一人前の製織技術者となった。阿部氏の製織技術における高い評価はどの点にあるのだろうか？

まず、温湿度環境に合わせて機械を調整する能力である。工場内の温湿度は毎日違う。その違いに合わせて準備工程の整経作業をおこない、製織時に糸切れや糸やせが発生しないようにする。タオルに使う原糸の伸縮性や性質を熟知しているからこそできる技であり、高いクオリティのタオルを安定的に生産することができる。

つぎに、製織技術そのものである。たとえば、経糸のテンション（張力）を均一にし、等間隔に真っ直ぐに引き揃える技術である。長年のキャリアから手のひらで糸に触れるだけで糸の状態を把握できる。

そして、上記の技術を基盤にした多彩な織りの技術である。さまざま異なる糸を組み合わせた複雑な織物や子供用の安心・安全なタオルなど用途に合わせた製品をつくることができる。

阿部氏は、2003年11月、「愛媛県技能士会」から技能士および技能士育成功労者として表彰された。長年にわたって今治のタオル工業の発展を技術者の立場から支えてきたことへの評価である。

2008年2月には1級技能士職業訓練指導員免許（愛媛県）を取得し、最前線に立ってみずからの技術を若い世代に伝授する役目を託された。

2012年5月には、技術者として厳しい条件をクリアした者だけに与えられる称号「タオルマイスター 」に認定され、今治タオル工業の技術者として錚々たるメンバーの仲間入りをした。つづいて2016年11月に愛媛県優秀技能者に選ばれ、2017年11月には愛媛マイスター認定を受けた。

阿部氏の活躍は海をわたり、台湾で出版された『今治毛巾的美學』（佐藤可士和・四國毛巾同業公會著、高佩琳編、程永佳訳、城邦文化事業股份有限公司[商業週刊]、2016年）において阿部氏と阿部春工場がとり上げられた。

ファミリー・ビジネスの強み

阿部春工場の最大の強みは、ファミリー・ビジネスにある。創業以来、下請けに徹してきたが、柔軟性を武器に大手が手を出せないニッチ市場を狙って商売をしてきた。一方で、家族経営だけに人力には限界がある。

阿部氏は、シャトル織機時代に一度24時間体制で機械を動かした経験がある。しかし、すぐにその挑戦は徒労に終わった。生産性を上げるために24時間稼働を試してみたが、限られた人材で一日中機械を動かしていると疲労感が半端ではなかった。それ以来、12時間～13時間体制を維持し、現在は朝7時から機械を動かし、夜の6時頃には仕事を終える。納期によっては夜の10時くらいまで稼働させるときはあるが、体の負担を軽減させるために自動停止装置を備え付け、糸切れなどが生じると自動的に止まるように工夫している。

近い将来、三代目が事業を継承するにあたり、前号で触れたように、会社の発展を見越して自社ブランド製品にもチャレンジしている。第一弾は「サウナ帽子」である。2つの色を合わせたサウナ帽子は3つのパターンで展開する予定である。

これまでタオル専門屋や請負先のタオルメーカーに販売・流通を任せていたため、阿部春工場が自社流通をおこなうのは初めてである。手探り状態ではあるが、家族一丸となって自社ブランド製品を世に出す準備は着々と整っている。



幼少の頃の長女・真衣氏（右）、
次男・育生氏（中央）、長男・玲央氏（左）

4. 今治タオルの人材育成への取り組み

社内検定制度の設置に奔走

阿部氏は、2002年から四国タオル工業組合（現・今治タオル工業組合）と「四国タオル技能士会」（現・「今治タオル技能士会」）の理事を務め、組織運営と後進の指導にあたってきた。特記すべきは、2000年に廃止となった国家技能検定「織機調整技能士」に代わる技能評価制度として、2011年の厚生労働省認定「四国タオル工業組合社内技能検定（織機調整）」の創設に尽力したことである。

「織機調整技能士」が廃止となった背景には、1990年代以降のタオル工業の低迷や受検者数の減少がある。しかしながら、製織は

タオルづくりの根幹をなす技能であり、産地の維持・発展には不可欠な技術であるため、産地ではかなり大きな問題として受け止められた。そこで立ち上がったのが、阿部氏をはじめとする産地の技術者や四国タオル工業組合であった。実際の事務手続きや厚生労働省（2001年発足）との折衝は、阿部氏と四国タオル工業組合の担当者の2人でおこなわれ、通常業務の傍ら、膨大な資料を準備し、関係各所の根回しに奔走した。この活動には2年の月日を要し、東京の霞ヶ関にある厚生労働省の窓口に計8回通い、担当者いかに検定制度が産地にとって重要なのかを繰り返し説明した。

織機調整にくわえて整経の職種追加を実現するために活動はつづき、2018年3月に「整経」の職種追加が認められた。これにもおよそ1年の時間を費やした。このとき、「社内技能検定」から「社内検定」に名称が変更された。こうした検定の設置によって、今治のタオル業界における製織技術と整経技術の標準化が促進された。

人材育成にも力を注ぐ

阿部氏は、2019年から今治タオル工業組合内の「ヒューマンリソース・ワーキンググループ」の委員長を務めており、とりわけ技術者育成に力を入れている。その成果として、国家技能検定廃止後、製織技術者育成の機会が少なくなるなかで愛媛県と協働で職業訓練指導員免許試験の創設を構想し、2019年に愛媛県主催「職業訓練指導員試験（織機調整科）」創設に漕ぎ着けた。

つぎに、将来のタオルマイスター育成のために、今治タオル産地独自の人財育成システムを構築し、その主要メンバーとして活動している。「独自」とは、2022年4月に開講した「今治タオルアカデミー」を指している。今治タオルアカデミーでは、レベルに合わせて「Silverコース（初級）」と「Goldコース（中級）」と「Platinumコース（上級）」の3つのコースが準備され、阿部氏のような熟練の技術者から直接技術を学べる場となっている。

くわえて、2019年5月に24年ぶりに大幅な改訂をおこなった『タオル技術情報解説集 タオル用語事典』（今治タオル工業組合）の編さん責任者として編集作業に携わった。

そのほか、当時の四国タオル工業組合によるタオルソムリエ制度が創設されると、阿部氏はすぐさま受験に応募し、2007年10月に認定第3号の資格を得た。

産地のためなら惜しまずなんでも協力する阿部氏の姿勢は、タオルづくりをはじめてから一貫して変わることはない。

（次号につづく）

